

学びの場、出会いの場、気づきの場

「トーキング・カフェ」

「トーキング・カフェ」と呼ばれる共通の関心を持った人たちが語り合うサロンが、近年注目を集めています。ここでいう「カフェ」は、飲食業というより、人の集まりやネットワークのことを指しており、会場も会議室やギャラリー、コミュニティスペースなど多様で、その目的もさまざまです。今回はそうした動きの中から、大阪市中央区、平野町の「船場アートカフェ」での「マンスリーアートカフェ」と、御堂筋界隈での「御堂筋トーキン・アバウト」の動きについて紹介いたします。

ソーシャル・キャピタルの醸成

「船場アートカフェ」は、2006年、大阪の中心地である船場に、大阪市立大学の研究施設・都市研究プラザによって、設置されました。ここを拠点に実地調査、ワークショップ、フォーラム、展示会などを行ってきました。メンバーは都市やアートをテーマに研究している大阪市立大学の教員を中心に18名。2011年に拠点を現在の「辰野ひらのまちギャラリー」に移したのを機に、「マンスリーアートカフェ」

と題したトーク企画をスタートさせました。

大阪市立大学特任講師・建築家であり、船場アートカフェの事務局を務める高岡伸一さんは、アートカフェの可能性についてこう語っています。

「アートには、人々に気づきを促す力や、知らない人同士のコミュニケーションを促進する力が備わっています。船場アートカフェではこの力を活かし、アートによる都市再生、地域活性化に取り組んでいます。」

近年マンションが増えたことで、船場界隈



重要文化財 旧小西家住宅(大阪市中央区道修町)

※内部見学不可



生駒ビルディング(大阪市中央区平野町)

北船場には、大阪を代表する近代建築物が点在する



山納 洋 やまの ひろし
大阪ガス(株)近畿圏部

■プロフィール

1993年大阪ガス(株)入社。神戸アートビレッジセンター、扇町ミュージアムスクエア、メビック扇町、(財)大阪21世紀協会での企画業務を経験し、現在近畿圏部にて地域活性化、社会貢献事業に関わる。一方でカフェ空間のシェア活動「common cafe」「六甲山カフェ」、トークサロン企画「御堂筋Talkin'About」等をプロデュース。



貴重な映像を観ながら、マスター役の高岡さんの解説が進むにつれて、会場に熱気が漂い始める



には新住民が増えてきていますが、古くからこの地域にいらつしやる方々との接点はほとんどなく、地域コミュニティの課題となっています。新たな都心居住者の中には利便性を求めて転居してくる方が多いのですが、地域に由緒ある建築が残されており、歴史や伝統が根付いていると知ってもらえると、地域に対する愛着が生まれます。船場アートカフェでは、両者の間をつなぎ、新たな都市コミュニティを生み出していくことができないかと考えています。地域の人たちに、トークや催しの時だけでなく気軽に立ち寄っていただけるコミュニティカフェにしていきたいですね」

船場アートカフェの取り組みは、人々のつながりが希薄になりがちな都市において、ソーシャル・キャピタル（信頼に基づいた社会的つながり）を再構築し、市民が協調・連帯していける土壌をつくるのが、強く意識されているようです。

筆者は2012年7月13日に開催された第11回「建設記録映画にみる大阪の都市変遷」に参加しました。参加者は24名。地域にお住まいの年配者から学生まで、幅広い層の方々が集まっていました。当日はコーヒーを片手に、

戦前戦後に建てられたビルの建設記録映画を鑑賞しつつ、マスターを務める高岡さんの解説をうかがうという展開。軟弱地盤にいかにして高層建築物を建てるかという課題と、それを解決するための建設技術の移り変わりについて、その片鱗を知ることができました。

アートカフェが生み出す 知の創発

高岡さんはまた、大学がアートカフェを運営する意義について、こう語っています。

「大学が地域の中でできることはまず、研究の最前線を持ち込み、市民の方々にお伝えすることですが、そこでの反応や感想を研究にフィードバックさせることができます。また大学の拠点が地域に根付き、安心感や信頼が生まれると、踏み込んだ研究や実践

船場アートカフェの事務局を務める高岡伸一さん



ができるようになります。そこで得られた知見を理論化していくことで、他の地域にも適用可能なものを作っていくこともできます」アートカフェには、アカデミックな知と市民知が現場で出会い、そこで知の創発が起こり、研究―実践活動が地域活性化につながっていくという、ダイナミックな動きを誘発する可能性があります。

知らない人同士が議論する場

筆者自身は2000年に、「扇町トークン・アバウト」というサロン企画を始めました。あの決められたテーマについて、参加した人たち自身が話し合うというもので、大阪市北区にあった複合文化施設「扇町ミュージアムスクエア(OMS)」周辺のカフェやバーなど10カ所の飲食店を会場に展開していました。テーマは演劇・映画・現代美術・音楽・文学・ポエトリー・お笑い・漫画・哲学など、さまざまな文化ジャンルにわたります。参加は無料で、主宰者はボランティア、参加者の方には自身の飲食代だけをお店に支払っていたたくシステムにしていました。2006年までの間に、通算700回以上開催しています。

同企画を始めるにあたって参考にしたのは、90年代にフランスで流行していた「哲学カ

フェ」です。これはカフェに集まった人たちが哲学的テーマについて議論するというもので、最盛期にはフランス国内100カ所以上のカフェで開催されていました。

当初は数人程度の集まりになることも多かったのですが、徐々に認知度も上がり、参加人数もさることながら、充実した情報交換ができるようになり、次第に定着していきました。

「哲学カフェ」とは？

哲学カフェは、哲学者マルク・ソーテ(1947-98年)がフランスのパリで創立した、哲学的な議論をするための草の根の公開討論会。1992年12月13日、ソーテはパリの近郊で初の哲学カフェを開き、日曜日ごとに何人かの友人を集め、2時間ほど哲学の討論を行った。少人数の集まりだった会も、次第に大学生や街の住民たちが加わり、約200人が集まる毎週恒例のイベントとなっていた。論じられた主題は、サンタクロースの伝説から真実、美、性、死など多岐におよんだ。



御堂筋Talkin'Aboutは、参加者が平等に意見を述べるサロン。vol.18「大阪のみどりを考える」は、愛国会館にて、文字通り「ラウンドテーブル」で開催

カフェでの論議と公論の形成

同企画は2011年より「御堂筋トークン・アバウト」と名称を変え、御堂筋界隈の会場で月1回のペースで開催しています。ナビゲーターは近代建築「生駒ビルディング」のオーナー・生駒伸夫さん、老舗喫茶店「平岡珈琲店」店主・小川清さん、ランドスケープ・デザイナーの小林卓司さんと筆者の4名です。

2012年7月23日に開催されたVol.18「大阪のみどりを考える」には15名の方が参加。冒頭に環境コーディネーターの金下玲子さんに阿波座南公園でのビオトープの実

践事例を紹介いただきました。都市緑化というよりは水辺ビオトープの話が中心となりましたが、その後、参加者の方からは、屋上緑化や街路樹、公園の緑、個人宅の前栽など、さまざまな「都市のみどり」についてのコメントが続きました。トークン・アバウトではこのように、参加者の誰かが持っている情報をシェアできる

船場アートカフェ

〒541-0046
大阪府中央区平野町1丁目5-7
辰野平野町ビル地下1階
辰野ひらのまちギャラリー
◇イベント・スケジュール等は下記サイトでご確認ください。
<http://art-cafe.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

御堂筋 Talkin'About (トークン・アバウト)

〒541-0046
大阪府中央区平野町4丁目1-2
大阪ガスビル1F「フラムテラス」
<http://www.facebook.com/MidosujiTalkinAbout>



前半のビオトープについての話題提供を受け、参加者全員が活発に意見を交わしていく

よう、毎回参加者全員に喋っていただくという運営方法をとっています。

御堂筋トークン・アバウトでは、これまでに、歴史、まつり、観光、ものづくり、都心居住、情報発信など、まちづくりに関わるさまざまなテーマのサロンを開催してきました。そこでイメージしているのは「ラウンドテーブル」です。これは課題の共有と情報交換、交流を目的とした円卓会議で、コミュニティの再発見や、希薄になった人間関係を補う役割も果たしています。

ドイツの社会学者、ユルゲン・ハーバーマスは、著書『公共性の構造転換』（未来社）の中で、18、19世紀のヨーロッパにおいて、文化や芸術に関心を持つ市民がコーヒーハウス・サロン・読書会に集い、開かれた雰囲気の中で文芸的な議論を交わし、その中から市民的公共圏が形成され、やがて政治について公に意見を交わす場へと変化していったことを指摘しています。

人々が集い、アートや文化について議論を交わすという営みは、地域の魅力を見出し、地域課題を意識して行動を始めた、コミュニティや公論を形成したりといった可能性を秘めています。そしてトークン・カフェの動きは、単なる流行ではなく、その可能性を確信する人たちが仕掛ける活動という意味合いを持っているのです。